仏教を身近にする伝道誌　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

d o h y o

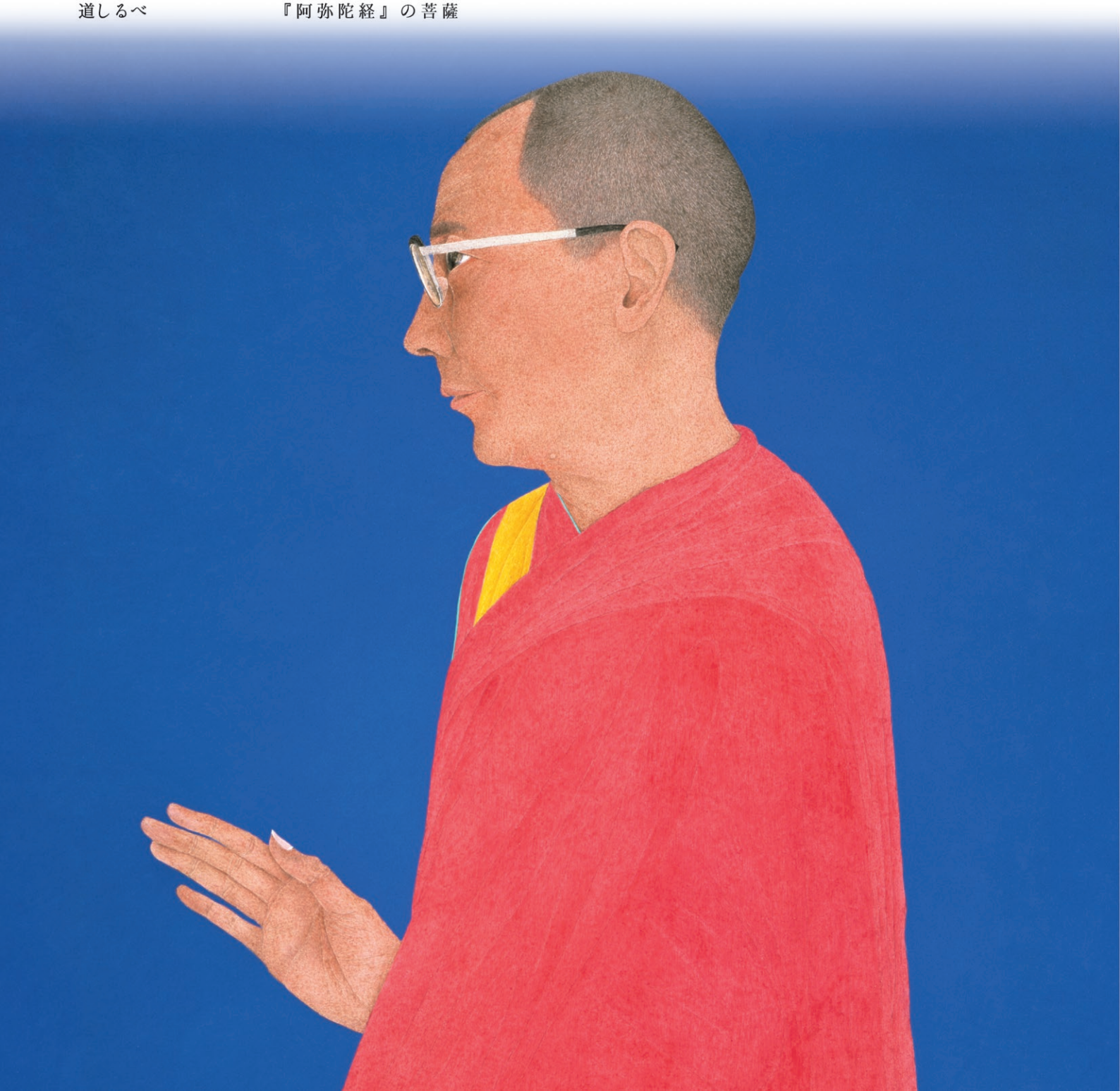
2023 冬季号

年間特集「不安」

第一回・心のざわつき　鵜飼　秀徳 さん

連載

あなたのいのちの物語　抑圧への戦い
伝承を科学する　能における囃子の役割
道しるべ　『阿弥陀経』の菩薩



年間特集

「不安」心のざわつき

第一回　鵜飼 秀徳 さん

3年以上に及んだ「コロナ禍」。この未曾有の感染症パニックから、私たちはようやく抜け出しつつあるように感じます。しかし、「心のざわつき」が収まらないのは、私だけでしょうか。

国際社会では、ウクライナ戦争が泥沼の状態に陥っています。わが国は隣国のロシア、中国、北朝鮮との緊張関係が続き、いつ何時、有事が起きて、巻き込まれないとも限らない状況です。

国内に目を転じれば、今年はさまざまな企業不祥事が露呈しました。中古車販売業のビッグモーターによる保険金不正請求、ジャニーズ事務所による性加害など、社会の信頼を失墜させる社会問題にと発展しました。

この世の中、何を信じれば良いのか。将来の日本、あるいは世界はどうなっていくのか。先の見えない不安が、次から次へと押し寄せてきます。

そんななかで、「仏教」が注目されています。仏教の考えはとても身近なものであり、シンプル。私たちの悩みや不安を和らげる一助になってくれる存在です。本稿ではいくつかの仏教用語を取り出して、解説してみようと思います。

冒頭に述べたように、何事も円滑にいかない不安定な状態を「我他彼此」といいます。家屋の建具の不具合になぞらえて「ガタピシ」と言うことがありますね。ガタガタ、ピシピシという擬音語から「ガタピシ」が生まれたと思う人は、多いでしょう。しかし、実は仏教用語なのです。

これは、「我＝自分」と「他＝他人」、あるいは、「彼岸＝悟りの世界」と「此岸＝迷いの世界」との二項対立の構図を表したもの。仏教はほんらい、無我（永遠不滅の実体があるものは存在しない＝とらわれない）の悟りの境地を理想としていますので、「私が」「あいつが」というような意識を持っている人は、悟りからは程遠い「迷い」の状態にあると言えるでしょう。

このような人は、日頃の行動が独善的になり、他者への気配りができません。昨今の国際紛争や企業不祥事はまさに「我他彼此」状態といえます。

他者を傷つけ、排除する行為は、お釈迦さまも嘆きのタネであったようです。お釈迦さまは、このようなことを言っています。

「愚かな人は他人に害を与えることを好む。
他人に与えることをしないで、奪うことをする。
そのような人は好んで他人の女を犯す」（法句経　第26章　心を汚す煩悩の章10）

今の世界はまさに「我他彼此」状態

いま風に言い換えれば、「パワハラをする人は自制が効かないのが特徴で、人の成果をも自分の手柄のようにし、セクハラも犯す」ということでしょう。

常に自分を正当化し、相手の非をなじるような者に、己の愚かさを気づかせることは至難の業です。では、「我他彼此」から脱却するためにはどうすればよいでしょう。それは「中道」を貫くことです。

再び、お釈迦さまがこの中道をどう説かれたか、エピソードを交えながらその意味をお伝えしましょう。

お釈迦さまは悟りを開かれて、最初に向かった先が鹿野苑（サルナー

ト）という楽園でした。そこで、５人の弟子たちに説法をしました。これを「初転法輪（しょてんぽうりん）」といいます。初転法輪では仏教の根幹をなす教え、「四諦」や「中道」、「八正道」が説かれました。初転法輪での、お釈迦さまの説法のエッセンスはこういうことです。

「この世は苦であり（四諦）、苦から解放されるためには、両極端に走らず、中道をいくことである。その中道とは具体的に、正しい道（八正道）の実践である」

中道は、「我他彼此」とは真逆の考え方。極端に走らない生き方をする、ということです。しかし、「真ん中を選択する」ということではありません。「ほどほどにしておく」というニュアンスとも異なります。

中道はあくまでも、八正道の実践にあります。

「八正道」の実践とは、次のとおりです。

１　正しい見解（正見）
諸行は無常だということを理解し、何に依ることもないものの見方をすること

２　正しい考え（正思惟）
我欲や怒り、憎しみなどを捨て、他者を害さない中立的な考え方をすること

３　正しい言葉（正語）
嘘をついたり、自己に都合のよいことばかりを言わないこと

４　正しい行い（正業）
むやみに生き物を殺したり、盗んだり、不倫など、人としてやってはいけないことをしないこと

５　正しい生活（正命）
自らを戒め、規則正しい生活を送り、決して人を騙したりしないこと

６　正しい努力（正精進）
罪を犯さず、すでに犯した罪は繰り返さない様にし、正しい生活を送るよう励むこと

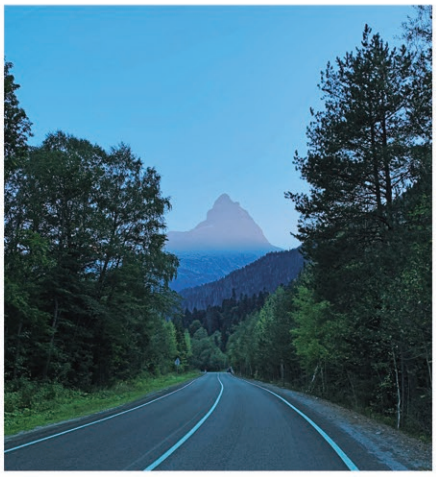
７　正しい意識（正念）
何ものにも惑わされることなく、物事の本質を見極め、仏の真理に向かって邁進すること

８　正しい注意（正定）
瞑想などで心を集中させ、煩悩を断ち切り、涅槃へと導くこと

苦から解放されるためには、両極端に走らず、中道をいくことである。

車の運転にたとえてみましょう。時速５０キロ制限の一般道で時速８０キロを出すと、危なくて仕方がありません。では、時速５０キロ制限の道で、時速２０キロで走ればすぐに停止できるから安全、ということでもないでしょう。今度は、後方から追突されかねません。

道の真ん中を走り続けたり、いかなる状況でも制限速度で走り続けたり、というのも極端な運転になってしまい事故を引き起こしてしまいます。大雨で前も見えない状態や、交通量が増えてきた場合は、制限速度以下にスピードを緩めることが大切です。



運転で大切なのは、正しい状況を適切に把握し、安全のために臨機応変に対処しながら運転するということ。しかも「その日だけ安全運転すればいい」ということでもありません。習慣として安全運転を心がけなければ、いずれ事故を起こしかねません。

中道の教えとは、バランスの取れた立場で、客観的に状況を把握し、何が適正かを判断し、正しい日々を送る、ということ。このバランス感覚を身につけるには、常に八正道を実践し、習慣にしていく必要があるのです。

混迷の時代を生きるための指針として、仏教を取り入れた生活をしてみませんか？

鵜飼　秀徳（うかい・ひでのり）

１９７４年生まれ。京都市出身。新聞記者、雑誌編集者を経て独立。「現代社会と宗教」をテーマに取材を続ける。著書に『寺院消滅』（日経BP）、『仏教抹殺』『仏教の大東亜戦争』（いずれも文春新書）。近著に『絶滅する「墓」』（NHK出版新書）。浄土宗正覚寺住職。大正大学招聘教授など。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

23話目

「抑圧への戦い」

ジョージ・オーウェル『動物農場――おとぎ話』

ジョーンズ氏が営む荘園農場で動物たちが反乱を起こし、人間を追い出して動物たちが自治を行う動物農場が樹立される。その革命を指導するのは豚たちだ。まずインテリ風の豚であるメージャー爺さんが唱える。「同志のみなさん、このように眺めるならば、われわれの生活につきまとっている、いっさいの災いは、すべて人間どもの横暴から生まれていることは、まるで水晶のように、明々白々ではないでしょうか？ただひたすら人間どもを追放せよ、しからば、われわれの労働の所産は、われわれの手に帰するであろう。ほとんど一夜にして、われわれは富裕にして自由の身となることができるのであります。」

メージャー爺さんは「万国のけだものたち」に訴える歌も歌い、動物たちは胸がわくわくする。その後、メージャー爺さんは静かに息を引き取るが、熱狂した動物たちはそれから3ヶ月間、秘密活動で準備をし、スノーボールとナポレオンというリーダー、そして雄弁家のスクィーラーの3匹の豚が中心となって計画を練り、6月のある日、ジョーンズ氏と家族や作男たちを追い出してしまう。農場を取り返そうとやって来た人間どもも見事に撃退する。そして、風車を建設してその力で理想社会を実現しようと過酷な労働に励む。

ところが風車建設の計画をめぐり、ナポレオンが陰謀を練ってスノーボールを追放してしまう。そして、次第にナポレオンの独裁体制が築かれていく。スクィーラーは独裁体制を押し進める弁舌に磨きをかける。動物たちはといえばさまざまだが、何があろうと黙々と自分の持ち場でたいへんな仕事をこなし、敬愛されている馬のボクサーは「わしがもっと働けばいいのだ」「ナポレオンはいつも正しい」の合言葉に従う。スノーボールが裏切り者だったとは信じられないと言ったりもするがスクィーラーがスノーボールは初めからジョーンズの手先だったときっぱりとした口調で述べると、「同志ナポレオンがそういうのなら、その通りに違いない」と同意する。

そんな働き者のボクサーも怪我をし、働けなくなるとボクサーは屠殺場に送られるが、それは獣医のもとへ行くのだとごまかされる。ナポレオンはボクサーをほめ讃える演説をし、ボクサーが好んだ二つの標語をみなに思い出させる。過去のことを覚えている者が少なくなると、ナポレオンはよくないことが起きるとスノーボールの陰謀のせいにする。その一方、他の農場の人間と手を結ぶようになる。

そしてやがて豚たちが、動物たちが一致団結して打倒しようとした支配者である人間のように二本脚で立つようになる。「ナポレオン自身が、ちゃんと二本脚で立ち、傲慢な視線を左右に投げながら、威風堂々と現われ、犬たちがそのまわりをじゃれまわっていた」。抑圧への戦いは新たなより過酷で残忍な抑圧を帰結する。

1944年に発表された作品だが、スターリンのソ連が意識されていることは確かだ。革命がもたらす新たな支配への辛辣な批判だ。他方、ナチスも念頭にあったことだろう。そして、3年後に完成する『1984』の超管理社会は現代文明の末路として構想された。支配関係と暴力への依存は、いのちを守ろうとする人々のいのちを窒息させる。私たちの身の回りにそのような困難が渦巻いている。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーフケア研究所客員所長、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくってもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

能における囃子の役割

舞台で能がおこなわれるとき、後方に並んでデンと構えているのが囃子である。舞台に向かって右から笛、小鼓、大鼓、太鼓の順にそれぞれ一人ずつ、正面を向いて座っている。太鼓が登場しない作品もあるが、そのときには残り三人が並ぶ。能の最初に登場し、舞台にずっと居て最後の最後に退場する彼らは、演奏をしていないときにも姿勢を正し、みじろぎもせずに座っている。見慣れてしまうと当たり前の風景だが、相当な苦行である。

江戸時代までの能の正式な上演では、将軍や大名などパトロンとなる人たちが、十メートル程度離れたところから舞台を見物した。パトロンの中には能の技術に精通した者もいた。彼らを前に、ひとつの失敗も許されない緊張感をもって演奏にのぞむ。その精神は今もなお受け継がれている。そのことは、舞台に座る囃子のキリリとした表情を見ればわかる。

それにしても出ずっぱりは酷である。オペラなど世界の音楽劇でも、演奏者は観客から見えないのが普通だ。なぜ囃子は、最初から最後まで舞台の上にいなければならないのか。

囃子の役割は、登場人物のセリフや歌の伴奏にとどまらない。重要な役割が二つある。一つは人物の登場の場面を囃すこと、もう一つは主役の舞を囃すことである。

能の主役には霊的な存在が多い。僧侶などに扮する役者が、旧跡に足を止めて祈祷をおこなうと、その前に幽霊が登場する。たとえば源氏物語の夕顔の女。能の中でその幽霊は、京都の五条の辺りに来た僧侶の存在や、祈りの声に引き寄せられて出てくる。そして実際の舞台の上において、その引き寄せを具体的におこなうのが、囃子の演奏なのだ。

人物は囃子の音に誘われて、あるいは乗せられて、幕の中から誘い出されて橋がかりを歩んで舞台に出る。その場面はまるで、笛太鼓を鳴らして巫子が憑依する神降ろしの儀礼や、梓弓や数珠を鳴らして死者の霊を呼び寄せる口寄せ儀礼そのものだ。

登場した幽霊は、自らの過去を物語るのだが、最後には言葉が尽きて感極まる。そこで主役の幽霊を無言の舞に導くのが、囃子の役割である。主役は囃子に乗せられて舞を舞うことで、言い尽くせない感情を表現し尽くし、魂を浄化させる。

以前に私は、フィリピン北部の山岳部で、祭礼の娯楽としておこなわれるゴング（ガンサ）の演奏と踊りの調査をしたことがあるが、今も印象に残っている場面がある。最初に演奏していたのは、さほど上手ではない人だった。その演奏にかわって、上手い人が演奏を始めた。するといきなり多くの人が立ち上がって、一斉に踊り出したのである。見事なコントラストに驚いたのだが、まさに囃す力である。私はそのときすぐに能の囃子を連想した。

余談になるが、雛人形の中に五人囃子の人形がある。能楽の囃子四人に歌い手を加えて五という陽数に合わせたのだろう。だが本来、歌い手は主役で囃される側であり、囃す側ではない。本来の能の囃子は笛、小鼓、大鼓、太鼓の四人である。

結論。囃子は独立した音楽ではない。といって歌や舞に従属する伴奏音楽でもない。人を揺さぶり、舞や踊りの行動に導く、つまり主役を囃す力を発揮してこそ、囃子という呼び名に値する。舞台の正面にデンと構えていなければならない理由がここにある。

雛人形の五人囃子　©Takanori Fujita
（上から三段目。向かって右から、謡、笛、小鼓、大鼓、太鼓）

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

◆『阿弥陀経』の菩薩

「仏説阿弥陀経・如是我聞・一時佛在・舍衛国…とはじまり、長老、舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉…と仏弟子の名が続き…文殊師利法王子・阿逸多菩薩・乾陀訶提菩薩…」と菩薩の名が続く。

舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉などは釈尊の直弟子として共に実在された方々であった。智慧第一、神通第一、頭陀第一などと、さまざまなエピソードも伝えられている。ところが文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩と呼ばれる菩薩方はどうなのか。

「文殊師利法王子」とは文殊菩薩のことで、獅子に騎り右手に利剣を持ち、左手には経巻を持し、理知的な少年の姿であらわされている。「阿逸多菩薩」は弥勒菩薩の別名である。京都の太秦の広隆寺に伝えられる半跏思惟の弥勒菩薩像は、国宝彫刻第一号として世界的に有名である。思惟に耽られる弥勒菩薩の姿は荘厳極まりない。逆に文殊菩薩が実際に獅子に騎って利剣を持ってあらわれたら、世間は大変なことになる。

仏像は仏教の伝道面では絶大な影響力をもった。しかし、特定の菩薩のイメージが強烈となり「智慧の文珠」「観音の慈悲」と特別視されるようになったと感ずる。だから手が千本ある千手観音や、顔が十一ある十二面観音などと、想像上の存在と受けとめられるようになったのではと思う。

ただ菩薩の姿はその心をあらわすもので、姿通りに実在されているとは思っていない。

阿逸多は弥勒の別名といったが、弥勒の語はサンスクリットの〈マイトレーヤ〉、パーリ語の〈メッテイヤ、メッテッヤ〉が弥勒と表記されるようになったもので、意味は「慈しむ者」である。そうすると弥勒菩薩とは慈の実現に向かって生きる者を意味する名となる。故に慈氏菩薩ともあらわす。

人々の幸せのために無償の愛を注ぎ、安らぎと幸せのために努力を惜しまず。それを慶びと感ずる者である。これは特定の人物をさす名でなく、この「慈」を志す者はすべて弥勒菩薩と名づけられる。そして何時の時代にも人々の目につかないところではたらき続けていてくださる方でもある。釈尊の存命中にもおられたはずだ。

浄土真宗の者はあまり意識しないように思うが、浄土に生まれる者として達成は不可能でも、尊い志はもつべきと思う。各地で愚かな殺戮がつづく世界にあって。

編集後記

今回の年間特集のテーマは「不安」である。誰しも感じている空気であろう。実際、パンデミック、物価高、異常気象、そしてもう決して起こらないはずの戦争、それもウクライナでさえ終わりが見えないのに今度はイスラエルである。連日の悲惨な報道、やるせない気持ちで一杯である。

実は丁度その50年前、私は中近東を通りイスラエルに3カ月近く滞在したことがある。今回の襲撃現場にもなった「キブツ」にもお世話になった。中近東に入るとまさにそこは異次元の世界。メッカに向かって礼拝する人たち、モスクから流れる拡声されたコーラン、宗教が生活の中に根ざしていた。第4次中東戦争の影響でシリアのダマスカスは爆撃の傷跡が残る。ヨルダンそこからはもう聖書の世界である。国境の小さい橋を渡ってエルサレムに入った。

イスラエルは奇妙な国である。表の顔は高速道路、緑化のためのスプリンクラーがあるアメリカ型の資本主義の国。その中に社会主義のコミューン農園「キブツ」が点在する。もちろんアラブ人も住んでいる。そこに軍服姿でヒッチハイクする男女の若い軍人たち。日本では想像できない色々な日常が、そして歴史が混在していた。今、その力による平和に亀裂が走っている。合掌

表紙の絵　ダライ・ラマ十四世　1981年作

ダライ・ラマ猊下の動静をしばらく聞いていません。今年2月に亡命政府のあるインドのダラムサーラに行った折には体調不良という事で面会出来ませんでした。人は寄る年波に無力です。これまで8回も面会をしていますが智的で頭の回転の速い方でした。1972年に日中国交が開始されると、それまで国連でも中国のチベット侵略とされていたのに日本政府はチベット解放という言葉を使用するようになり、現在に至っています。国交回復後、東京での国際仏教徒会議の折には日本政府は猊下にビザを1日しか発給しませんでした。その後私は知人と一緒に、アメリカ招聘の帰路、日本に立ち寄って法話をお願いしたいとの手紙を出し、快諾を得て龍谷大学講堂で法話と質疑応答をしてくださいました。仏教の本質の素晴らしい法話で、当日は宣伝もしていないのに750名もの人が参集し、帰路の講堂から正門までの両側には自然に列が出来、合掌してお見送りしたことが鮮明によみがえります。後で一筆言葉をお願いしましたら、こんな筆は初めてとおっしゃりながらも見事な筆さばきで「心の中に平安を」とチベット語の草書体で書いてくださいました。時々その言葉をかみしめています。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065　06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇二三年 冬季号 2023年12月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com